

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】岡野英之

【所属】(助成決定時)大阪大学大学院人間科学研究科

【研究題目】シエラレオネ、リベリアの紛争発生、継続、越境の要因分析
—「青年層」を中心とした考察—

【研究の目的】

貴財団に申請時に提示した目的は、シエラレオネとリベリアという二つの隣り合う国でそれぞれ発生した内戦の展開(観察できる歴史的展開、戦況や和平合意、武装勢力の行動)がなぜ生じたのか、両国の相互作用はどのように起こったのかを明らかにすることであった。特に、「青年」層が紛争にどのように加担したのかを中心に明らかにすることが目的であった。

助成金の大半は現地調査で使用したが、現地では、現地に到着後、何ができるかを考え、その問いをさらに精緻化した。その結果、調査対象を、シエラレオネで政府側民兵組織 Civil Defense Force (CDF)に参加し、リベリア第二次内戦で反政府組織 Liberians United for Reconciliation and Democracy (LURD)に参加した人々に絞った。つまり、二つの紛争のどちらにも参加した人びとの調査に限定したのである。彼らがどのように CDF から LURD に移り、第二次リベリア内戦に参加したのかを明らかにすることに調査目的を限定した。

【研究の内容・方法】

下線部、申請時に提示した目的は、現在執筆している博士論文の問いであり、三つの研究手法にて、アプローチをしている。すなわち、(1)文献調査、(2)現地の新聞による情報収集、(3)元兵士からの情報収集、である。(1)については、日本で行い、(2)(3)については、本助成金を用い、現地調査を行った。平成 20 年 10 月 1 日から 21 日までの 20 日間リベリアの首都モンロビアに滞在し情報収集を行った。(3)については、LURD の元兵士が多く集まる、セント・ポール・ブリッジ集落に滞在しながら、情報収集を行った。この集落には以前の調査で知り合った元兵士がおり、彼の家に滞在し、元兵士たちと近所付き合いをした。彼はシエラレオネ人であり、LURD に参加した元 CDF 兵を多く知っていた。彼らの間で交わされる日常会話や議論の中から情報を得たり、インタビューを行った。前者については、元兵士たちの間で「内戦について調べに来た東洋人だ」と紹介されると、そこから彼らの会話の中で当時を振り返った話がなされたり、時にはその頃について議論が始まった(あの時どうすべきだったとか、司令官に対する評価など)。後者のインタビューについては、ちゃんと話を聞く人数を少数に絞った。よって、話を聞いた人数は 10 人と少ない。その理由は、インタビューをされる人は、当時を振り返り、細かい知識のない外国人に自分の体験を説明できる能力が必要とされるためである(その他にも多くの人にインタビューをしようとしたが失敗したものも少なくない)。よって、多くの人に話を聞くよりは、彼らの話をじっくり聞くことにした。多くのインタビューは通算 5-6 時間と長時間のもので、2-3 回に分けた。また、説明が下手な元兵士に対しては日常会話の中で情報を聞いた。

【考察・結論】

この調査において、どのように CDF から LURD へ移ったのかを聞いた結果、シエラレオネ政府側の武装勢力であった CDF の組織体制は、リベリアの反政府組織である LURD へと転換されたことが明らかになった。これは、CDF のコントロールするリーダー層の意図ではなく、国境を越えて人間関係を持つ兵士たちによって自発的になされたものだという。CDF の中心となったメンデ人はシエラレオネ、リベリアに分布しており、その中には、両方の国において親戚関係や友人関係を形成する者もいる。彼らの中でも、リベリアとの関係が強い人びとが、第一次内戦後、反政府組織のリーダーから大統領になったチャールズ・テイラー(Charles Taylor)に対して蜂起を行ったといえよう。LURD は 2001 年にギニアからリベリアへと侵攻したが、彼らはその蜂起に向けて三つのこと

を行った。ひとつは、リーダー層に隠れて、リベリア人をリクルートし、CDF 兵士として CDF の基地に駐屯させた。ふたつめは、リーダーとなりうるリベリア人の重要人物を探した。3 つ目は資金提供者を探したことである。結局、資金提供者はギニア政府となった。人員、設備、組織体制の準備が整うと、彼らはギニアへと移動し、武装蜂起を行ったのである。例えば、CDF の参謀はシエラレオネ出身だが内戦前半はリベリアに住んでいたため、LURD の創立メンバーになったという。彼はシエラレオネ政府が危機に陥ったときに、CDF へ参加するためにシエラレオネに移ったが、その才能により参謀にまで昇進したという。彼は、CDF の中でもリベリアと関係の深い人びとにリベリアへの侵攻を持ちかけ、かつ西アフリカやアメリカに亡命しているリベリア人政治家にコンタクトを取ったという。彼によると、反政府組織の正統性を保ち、かつ資金を獲得するためには、リベリア人政治家や有力者を呼び寄せ、政治部(Political Wing)を構築することが必要だったのである。政治部設立後、この元 CDF 参謀らは実戦部隊として裏方に回ったという。

また、実戦部隊となる兵士であるが、CDF にいたリベリア人だけでなく、CDF に属する多くのシエラレオネ人兵士が、傭兵として LURD に参加した。彼らは、紛争が終わりつつあっても仕事が見つからない中で兵士として「飯を食べること」のできる道を選んだのである。彼らは、実戦を積んだ兵士として有能であったと LURD のリベリア人兵士は述べた。

さらに情報を聞いていくと、武装勢力幹部や兵士が移動することによって、紛争における経験知が積みれ、組織運営や人びとの統率が洗練されていくプロセスが明らかになった。2001 年に蜂起をおこした LURD はこれまでの紛争経験の集積のもと、組織された勢力だといえる。リベリア、シエラレオネは 1990 年代を通して武力紛争に巻き込まれた地域である。まず 1989 年にリベリアにおいて紛争が発生し、リベリア全土を巻き込んだ。次に、リベリア紛争が波及する形でシエラレオネにて紛争が勃発し、1995 年頃までには紛争はシエラレオネ全土にまで広がっている。CDF の多くの兵士は、シエラレオネ紛争に巻き込まれ兵士にならざるを得なかった存在であるが、彼らは 2000 年頃にシエラレオネ紛争が終わりに近づくと、LURD の結成をチャンスと見て、そこで生活の糧を見出している。その際、戦闘や武装勢力の組織管理のノウハウは技術移転された。LURD はある程度、統制された武装勢力だったとの評価があるが、それに関して LURD 幹部の一人が語るには、LURD は最初から兵士を統制するノウハウがあったこと、また、どのように残虐行為を隠すかを知っていたからだという。このように、人の移動によって武装勢力内でのノウハウも同時に移転されたといえる。

(了)